



2009年(平成21年)
4月号(No. 767)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL ● <http://www.jac.or.jp>

e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

日本山岳会の森づくりとは——
名古屋で開かれた連絡協議会と

高尾の森づくりの会の現況	1
高頭仁兵衛翁の功績と遺徳を偲ぶ「高頭祭」	4
堀田弥一名誉会員の百賀を祝う	6
AC名誉会員認証へ、ヨーロッパの旅(その2)	7
東西南北	8
六鶴保と南方熊楠	
南アルプス山岳図書館	
究極の歩行法を開発	
活動報告	10
図書委員会/海外委員会	
図書受入報告	11
図書紹介	12
計報 原真氏、吉田宏氏	14
会務報告	15
ルーム日誌	16
会員異動	17
INFORMATION	18
博物館訪問	19
田淵行男記念館	

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 10~20時
水・金 13~20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10~18時

日本山岳会の森づくりとは—— 名古屋で開かれた連絡協議会と 高尾の森づくりの会の現況

日本山岳会のいくつかの支部で森づくり活動が盛んに行なわれている。環境保全に則した森づくりは促進されるべきであろうが、いくつかの問題点も指摘されている。そこで、そうした支部間の情報交換を目的に開催された連絡協議会の報告を、猿投の森づくりの会・小川副代表に、自然保護委員会と高尾の森づくりの会の現況報告を成川常務理事にってもらった。

第3回森づくり連絡協議会開催

第3回森づくり連絡協議会が、2月28日、東海支部で開催された。森づくり連絡協議会は08年1月、東海支部猿投の森づくりの会の呼びかけで始まり、同年8月、岐阜支部で2回目が開催されたのに続くもの。山岳環境保全に貢献する

ため各支部や地域がどのように取り組み、活動をしているか——。情報交換し、相互支援をすすめるようという趣旨で開かれている。第3回協議会は東京(高尾の森)から河西代表をはじめ6名、千葉から篠崎支部長、岐阜(権現の森)

から早田支部長ら5名、京都から伊原会員ら2名、関西から秦会員、福井から宮本支部長、広島から前垣会員、東海(猿投の森)は橋村代表はじめ5名、それに東京から吉永常務理事の出席を得て、総勢23名の会議となった。白神山地ブナ林再生事業に取り組んでいる青森支部のほか秋田支部、宮崎支部、山陰支部などにも呼びかけたが、都合で参加できなかった。

会議は猿投の森・橋村代表の司会進行で進められ、現況報告と論議が交わされた。以下、各支部からの報告を要約する。

各支部の森づくりの現況

・千葉支部(篠崎支部長)

現在、森づくりはしていない。しかし今後、里山の生物多様な

どに注目した「里山づくり」をしたいと考えている。

・岐阜支部(藤井会員)

平成17年2月より、奥美濃「権現山」県有林にて、植樹、登山道づくりを主目的に森づくりに参加している(JAC会員は約35名)。平成18年4月に第1回森づくり、平成19年には第2回の植樹と登山道づくりを行ない、登山道を権現山の頂上まで完成させた。

・東京(高尾の森・龍会員)

平成21年度の主な行事は、月1回の定例作業のほかに4月12日に植樹祭、5月9~10日に日比谷公園で開催される「森林の市」に参加、5月22~24日には「三宅島緑化再生プロジェクト」の開催を予定している(会員220名、うち70名がJAC会員)。

・関西支部 (秦会員)

六甲の「おたふく山」で、草原の復元活動をしている。これは、ススキ原から、ネザサに移行した草原に手を加え、もとのススキ原に戻すもので、これまで9回の作業に、毎回7、8名の関西支部員が参加している。

・京都支部 (明井会員)

現在、森林の勉強をしながら、森づくり活動を琵琶湖周辺で開始するための候補地を探している。

・広島支部 (前垣会員)

支部としてではないが、西条酒造協会の自然環境対策運動 (山と水の環境機構) に参加している (年間5、6回でJAC会員は3、10名)。また、今年も「広島山の日・県民の集い」の実行委員会に加わり、開催日の6月7日に向け準備をしている。

・福井支部 (宮本支部長)

支部としての森づくりを、越前町糸生地区の「泰澄の杜」近くの町有林で平成20年10月26日に開始した (約20名が参加)。

・東海支部 (小川)

平成20年度は、定例作業、臨時作業あわせて33回実施し、延べ647名が参加した。今後の予定と



活発な意見が交わされた森づくり連絡協議会

して来年10月に愛知・名古屋で開催される「COP10」(生物多様性条約第10回締約国会議) でパートナーシップ事業を行いたい。具体的には①6人の生態学者による講演と観察会、②森の幼稚園の開園、③森の音楽会の開催、④COP10記念森林観察道の作設、以上4つの企画を考えている (会員110名、うち支部・支部友会員70名)。

この企画に対し広島支部の前垣会員をはじめ多くの参加者から、「COP10」は国の事業であることから、山岳会としてもこの企画を本部主催、支部主管の事業とする方が、経費確保や公益事業実績

を残すためにもよいのではないかと意見が出された。吉永常務理事は理事会などで検討することを約束した。

新しい法人制度への対応

吉永常務理事から「現時点で公益法人、一般法人、どちらを選択するか決めていないが、どちらにしても森づくりが山岳会にとって重要な課題だという認識で進んでいる」という報告があった。

支部への森づくり助成

各支部が行なう森づくり事業に、本部から助成金を出すべきだなど、次のような意見があった。

「企画を出してきた支部には援助をすべきである」

「各支部が次々と申請すると、本部の蓄えはすぐなくなる。各支部で調達すべきである」

「具体的な案がある場合は申請すべきである。しかし助成金によって支部の自主性が損なわれてはいけない」

「洞爺湖サミットに匹敵するCOP10にはJACの名前で参加し、経費等を分担・確保し、支部が実施面を担当すればよいと思う」

など、本議題には各支部から多くの意見が出されたが、統一した結論を得るには至らなかった。

自然保護委員会と高尾の森づくりの会

高尾の森づくりの会から次のような状況報告があった。

「この2年、急に高尾の森づくりに対する統制が強くなってきた。すでに2回にわたり、自然保護委員会と高尾の森づくりの会の間で話し合いが行なわれている。最近も、会長名で会運営に対する『指示書』が送られてきた。厳しい内容で、対応を検討している」(3ページ参照)

なお、篠崎会員 (自然保護委員会委員) から、去年8月の全国支部長会で私案として示された「森づくり委員会設置案」(本部に新設) の説明があり、意見交換が行なわれた。

東海支部の場合、組織的な位置づけとしてはすでに支部友会というお手本があり、それに準じて、猿投の森づくりの会も組織に組み込まれた、という説明があった。

また「篠崎案に賛成する。自然保護委員会が森づくりの会を統括



高尾の森づくりの会が行っている下草刈り

するのは無理があると思う」「今後
も支部長会議などで検討する必要
がある」などの意見が出た。

会議のあとの連絡協議会では、

「高尾の森づくりの会」 運営正常化で確認書

当会の自然保護委員会と高尾の
森づくりの会の間で、組織運営を
めぐる見解の相違から対立が深ま
り、ここ2年ほどは事務連絡も滞
るなど不正常な状態が続いていた。
当事者間の話し合いがつかないた
め理事レベルで調整に乗り出した
結果、このほど運営正常化に向け
て基本的な合意が得られた。

引き続き只木良也名古屋大学名誉
教授(国民森林会議会長)の講話
会が開かれ、翌3月1日、猿投の
森を視察して解散した。

(猿投の森づくりの会副代表・小川務)

すでに森づくり活動が定着して
いる支部や森づくり活動への参加
を検討している支部も幾つかある
なかで、「自然保護委員会」「高尾
の森づくりの会」で何が起きてい
たのか経緯の概略を説明しておこ
う。

森づくり活動のスタート

JACの「森づくり」への取り
組みは10年前、自然保護委員会で
河西瑛一郎理事(当時)が自然保
護の実践活動を行なうためのフィ
ールドを持ちたいと提唱して始ま
った。東京近郊で大勢が集まれる
場所、「公の山^{おおのやま}」という条件で国
有林にターゲットを絞り、林野庁、
森林管理局と折衝して「高尾の森」
の借り受けが決まった。その際、
JACだけでなく一般ボランティア
の参加も受け入れるという条件
がついていた。

2000年12月には所轄の森林
管理署長とJAC会長の間で協定
が結ばれ、翌年春から本格的な活
動がスタートした。会の名称は、
2001年5月、所管する委員会
名を入れて「日本山岳会 自然保
護委員会 高尾の森づくりの会」
と定められた。

順調な成長から幹部間の確執へ

下草刈りなどの森林整備、作業
歩道や標識類の整備、森林教室や
自然観察会の開催など、森づくり
の会の目的に沿った活動は順調に
進み、数年にして会員も150人
を超えた。JACの会員より一般
ボランティアの方が多い構成とな
った。自然保護への関心が高まる
時代の流れに乗ったといえよう。
4月恒例の植樹祭には数百人が集
まった。

運営資金は公的助成金、企業協
力金、法人会費、それに個人会員
からの年会費(3000円)で賄
われた。

しかし、自然保護委員会と「高
尾の森の会」の間に見解の相違、
確執が生じはじめた。07年1月ご
ろにはその兆候が見える。「高尾の
森」の事務局長から自然保護委員

長に転じていた山川陽一氏(07年
6月からは自然保護委員会担当理
事)と、「高尾の森」の河西代表、
龍^{りゅう}久仁人事務局長ら幹部との、会
の運営を巡る対立である。

山川氏は組織上「高尾の森の会」
の活動を所管する立場から、必要
な事務手続きの履行、報告の義務
など、組織の一員として守るべき
ルールの順守を主張した。一方の
河西氏らは、これを現場に対する
統制強化だと反発し、実働集団と
しての自主的な運営を強調した。

07年5月に開かれた自然保護委
員会では対立が頂点に達し、もは
や話し合いとか議論の場ではなく
なった。感情的ともいえる対立が



4月12日、高尾の森で、植樹祭と平行して行なわれた親子森林体験教室

両者の溝を深めた。これらのことは「高尾の森」の一般会員には余り知られていないところで進行した。

以来、両者間にコミュニケーションの機会はなく、本来欠かすことのできない事務連絡さえも途絶えた。この間、規約改正によって、会の名称から「自然保護委員会」を外すという変更が無届で行なわれた。

会報『山』08年11月(762)号と同12月号のオピニオン欄に「高尾の森づくりの会」の活動のあり方をめぐって2人の会員の相反する意見が掲載され、会報編集委員会にも「事情がよく分からない」と、説明を求める声が寄せられていた。

理事会レベルの調整と会長指示

昨春秋以降、理事会レベルで打開策を探り、宮下会長の指示で調整作業が始まった。担当の堀井昌子理事らが、双方の代表同席で事情聴取し、まずは問題点の把握、整理に努めた。規約改正の届け、名称の変更、契約・協定書等の処理、業務・会計報告などに問題があることが分かった。

所管の自然保護委員会を無視して運営が行なわれている実態が明らかになった。同時にそれらを放置していた自然保護委員会の責任が問われ、理事会でも対応の遅れが反省された。

今年2月、高尾の森づくりの会に対し宮下会長名で「順守・改善指示書」が出された。自然保護委員会の管轄の下に活動することの確認を求め、報告・承認事項を指示する文書で、人事、安全確保、営利活動の規制、罰則規定にまで踏み込んだ内容である。

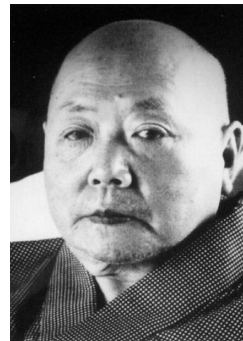
高尾の森づくりの会から、3月末になって順守・改善指示書の大筋を受け入れる回答書が書面で送られてきた。自然保護委員会の所管のもとに活動することが確認された。

今後、具体的に詰めなければならぬ点はいくつか残っているが、運営正常化へ確実な歩みを踏み出したものと理解している。「高尾の森」だけでなく、各地域、各支部の「森づくり」が、それぞれ地域支部の特性を生かしながら、日本山岳会にふさわしい活動を展開していくことを期待している。

(常務理事・成川隆顕)

ヒストリー

高頭仁兵衛翁の功績と遺徳を偲ぶ「高頭祭」



創立会員の1人、高頭仁兵衛

高頭仁兵衛(たかとう・にへい 1877-1958)は、明治10年、越後の豪農の長男として長岡市深沢に生まれた。本名は式、仁兵衛は高頭家当主の世襲名である。

13歳のとき恩師と初めて弥彦山に登り、登山の楽しさを知ったといわれている。明治38(1905)年創立の日本山岳会発起人7人のうち、唯一人、雪深い越後の片田舎から仲間入りし、創立の中心人物であった小島烏水とともに純登山グループであった。ほかの発起人は植物愛好グループであった。小島烏水に続き第二代会長を務めた後、名誉会員に推挙され、昭和33年、82歳で逝去した。日本の近代登山の普及に尽力された功績は計り知れないものがある。

山田一男

特に、草創期の当会の組織化に不可欠な金銭面と人員面(会員確保)に対して強力な支援をされてきた。「向こう10年間、毎年1000円を会に提供する。ただし、10年経っても自立出来ねば会を解散すること」を山岳会と約束した。当時の会費は1円であるから、1000人分に当たることになる。ちなみに当時の米価60^キは約6円であった。

「最初の会員名簿」(明治40年3月5日「山岳」二年一号付録)によると、全国会員数418名中、新潟県内110名は最多の東京市に次いで僅差の2番目。この110名会員一人ひとりを室賀輝男・前五代越後支部長が長年追跡調査して「越後山岳・11号」に発表されている。まさに貴重な資料であった。それによると、新潟県内のほとんどの会員は高頭翁周辺の人脈に占められていた。高頭翁わずか28・29歳の時である。高頭翁がおられなかったなら、今日の日本山

岳会は存続していなかった、とい
つても過言ではないであろう。
そして、いまだ不滅の日本最初
の山岳辞典『日本山嶽志』(140
0頁、収録山数2200、明治39
年刊)を6年がかりで編集。日本
アルプスはじめ全国の山々や平ヶ
岳初登頂など多くの登山記録を残
され、山岳信仰や一部資産階級の
道楽でしかなかった山を大衆に普
及させた功績がある。

また、地元にあつては農業、青
少年の育成、産業・教育の振興に
も多大な援助をされ、村人はその
謝恩の碑を邸前に建立することに



1912年、ウェストンの招待会で。左端に出席した高頭の顔が見える

なった。

平成19(2007)年7月25日
開催された「高頭仁兵衛翁寿像碑
前祭」、すなわち「高頭祭」は50回
を迎えた。そして記念誌『第50回
記念・写真でみる高頭祭のあゆみ』
が越後支部から発刊されている。
昭和25年、寿像建立から57年、第
1回からの半世紀余の歴史が写真
と資料でまとめられ、来訪の歴代
会長と役員多数の名も記されて、
誠に意義深い貴重な記念誌として
評価されている。

高頭翁寿像碑建立は、偉大なる
翁の功徳を後世に伝承するため藤
島玄・初代越後支部長の熱意と執
念によって実現したものである。
昭和25年5月、越後一宮弥彦神社
で除幕式、7月、弥彦山頂で竣工
式が執り行なわれ、10年後の35年
5月に名誉会員、冠松次郎翁を迎
えて現大平山に寿像を移築した。

高頭祭の開催は、初期のころは
不定期で、4年ぶりに再開された
昭和42年の第10回から毎年5月実
施に定例化された。その後、48年
から弥彦神社灯籠神事に協賛の
「弥彦山松明登山祭」と併催する
こととなり、7月25日に変更し、
現在に至っている。

碑前には支部会員はじめ近郷岳
人たちが多数参集して翁の遺徳を
偲び、参加者同志の親睦も深めて
いる。そして、弥彦山頂の松明登
山祭に合流して松明を掲げて下山
するのである。このように半世紀
以上も継続できているのは、歴代
越後支部長と支部会員、特に長年
尽力されている弥彦山麓と近郷在
住会員のおかげであろう。

現在、全国各地でウェストン祭
が開催されているが、当会創立発
起人や歴代会長の遺徳を偲ぶこの
ような行事は数少ないようである。
毎年開催されているのは越後支部



寿像碑前に多数の岳人が参集して遺徳を偲んだ第50回高頭祭

の高頭祭(発起人・二代会長)の
ほかに、山梨支部の木暮祭(三代
会長)、京都支部の今西レリーフ祭
(十二代会長)だけであろうか。
きたる平成21年7月25日は土曜
日。寿像建立して59年、高頭祭は
52回を迎える。高頭翁の遺徳を偲
び、今年もぜひ多くの方に参加し
ていただきたいと思う。

ピープル

堀田弥一名誉会員の百賀を祝う

今村千秋

春爛漫の3月21日、堀田弥一氏の百賀を祝う会を開催した。会場は堀田氏の母校、立教大学校内の建築百年を越える第一学生食堂である。堀田氏は、1936(昭和11)年に日本人で初めてのヒマラヤ遠征(立教隊)の隊長を務め、ナンダ・コット峰(6867m)に初登頂を果たした。

祝賀会当日は、当会の宮下秀樹会長はじめ関係者各位と立教大学山友会などから70名を超える方々が参加。1月末にめでたく100歳を迎えられた堀田氏の長寿をお

祝いした。まず、立教大学の大橋英五総長(元立教大学山岳部部長)が祝辞を述べた。次に、当会の宮下会長が「初めて100歳を超える方と握手したが、余りにも力強いので驚いた」と会場の笑いを誘いつつ、堀田氏の日本の登山界における功績を称えた。

お礼の挨拶に立った堀田氏は、左手に杖、右手にマイクを持ちながら、「イギリス、ドイツ、フランスなどのヒマラヤ登山の原書の報告書を胸おどらせながら読み、ナンダ・コットへとつながっていった。

登山の経験を積み重ねれば雪崩などの危険を避けられる。97歳までは歩いてゴルフをしていた。最近はずりトを使うので足が弱った」などの話を、背筋をピンと伸ばしながら15分以上も熱く語った。挨拶の後には「次に会うのは私の告別式でしよう。その時は皆さんの顔をゆつくり見られないから、今日はしっかりと見ておきましょう」と、満面の笑みでユーモアたっぷりに締めくくり、再び会場の笑いを誘った。

次に、当会からは小倉重子さん、立教からは山岳部の現役女子部員から、それぞれ花束が贈呈された。乾杯の音頭は、当会会員の小原晴子さんにお願いした。小原さんは、堀田さんと一緒にナンダ・コットに登頂した故・小原勝郎さんの奥様で、「召集令状が堀田さんと小原にきた時に箱根の富士屋ホテルに2泊して別れを惜しんだ」と、当時の思い出を披露、全員で元気に乾杯、懇談に移った。

ビールのグラスを手に椅子に座った堀田さんの周りには、最近のガルワール・ヒマラヤの様子を報告する人、会社の先輩にナンダ・コット登頂の隊員がいたことを話

す人、共通の知人の現況を情報交換する人など……。入れ替り立ち代り懇談・写真撮影と大勢の方々が取り囲み、歓談が続いた。われわれ立教大学山岳部の世代にとつて、堀田先輩は雲の上の存在、近寄りがたい威圧感のある方であった。その先輩は、終始笑顔で皆さんと楽しくうに対応されていた。その様子を拝見しながら、思い出が走馬灯のように駆け巡った。

最後に、本会の副会長で立教山友会の鰐坂青氏が、1988年の三国合同チョモランマ登山の時に中国側から空撮した写真を記念品として贈呈した。続いて、校内の芝生の上で堀田氏を中心に記念撮影を行ない、なごりの尽きないお祝いの会を終えた。

今、少人数で気軽にヒマラヤ登山が行なわれ、8000m峰からパリエーションルートへと日本のクライマーの活躍が続いている。思い起こせば、その足がかりとなる70年以上前の遠征隊を一大大学のクラブが組織し、初登頂したのだ。その遠征と登頂の意義を改めて考えると、堀田先輩への尊敬の念が沸々とわきあがり、益々の長寿を祈念する一日であった。



背筋をピンと伸ばして挨拶する堀田弥一名誉会員

トラベル

AC名誉会員認証へ、ヨーロッパの旅(その2)

中村 保

2月16〜18日(湖水地方)、ヘスケットという歴史のある村に住むダグ・スコットの家に世話になる。周囲は牧場と畑、半野生のウマやシカがいる。キツネ狩りも行なわれている。奥さんのトゥリッシュがよく気を遣ってくれた。

ダグはネパールでのボランティア活動を主宰し、学校、医療など40のプロジェクトを進めており、講演の収益はネパールでの活動費につき込んでいる。ペンスのホテルで催された講演には120名以上が出席、大盛況だった。ダグは、1年中断していたフランスの黄金のピッケル賞の審査委員長を引き受けている。「登山はコンペティションではないので、オリンピックのように優勝者を決める必要はない」と、登山哲学を語ってくれた。登山界におけるダグの影響力は大きい。優れたクライミングを幾つか推賞する方式になるだろう。日本隊の昨年の成果を大いに評価していた。

2月18〜20日(ケンブリッジ)、ケンブリッジではヘンリー・デイが迎えてくれた。彼はケンブリッジ出身の退役大佐で、英国陸軍登山隊で何度も遠征、1970年にはアンナプルナI峰の第2登を行なっている。来年はアンナプルナI峰初登頂60周年、第2登40周年を記念して王立地理学協会でシンポジウムが行なわれる。

ケンブリッジでの講演は学生、若者を中心に約50名ほどが出席、活発な質疑応答があった。ケンブ



ダグ・スコットの家で記念写真におさまる中村名誉会員

リッジ大学山岳部の現在のアクティブ・メンバーは30名ぐらいだという。

2月20〜27日(ダブリン、ハンブルク、チューリヒ)、UIAA年次総会で親しくなったダブリン(アイルランド)在住のジョス・ナイラムの依頼で、アイルランド山岳協会が準備したホテルのホールで講演をした。70名ほどが出席。アイルランドには山岳クラブとしてジョスも創立にかかわったアイリッシュ・マウンテンアライニング・クラブ(1949年創立)があり、現在250名ほどの会員がいるという。

ハンブルク(ドイツ)には3日間滞在、『チベットのアルプス』の英語版の打ち合わせを行なう。3分冊とし範囲も四川、青海省の揚子江源流までカバーする。第1巻は「念青唐古拉山東部と崗日嘎布」で、来春、出版を予定している。その後、引き続き半年ごとに出す予定である。

25日から27日までチューリッヒ(スイス)に滞在。友人であるスイスの大手投資銀行UBSのアナリストで、スイス山岳ガイド組合のメンバーでもあるクリステヤ

ン・フレイに世話になる。奥さんは漢族だがウルムチ出身、新疆山岳協会で働いていた。

英国アルパインクラブの友人らの好意に甘えてヨーロッパでの休日を楽しみ、3週間の旅を終えた。



東西南北

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度でお願いします)

六鵜保と南方熊楠

井上 佑

六鵜保^{ろくうたもつ}は大分県長洲町(現・宇佐市)の旧家に生まれ、1908(明治41)年、山口高等商業学校第一期生として卒業、三井物産に入社した。

南方熊楠^{みなかたゆうすけ}は、1886(明治19)年からアメリカ、1892(明治25)年からイギリスへ留学。神社合祀反対で社叢の天然記念物を守り、隣家との争いから「日照権」を確立したエコロジストの先駆者でもある。

合祀反対運動に伴い、1908(明治41)年の『山岳』六年三号に「祖国山川森林の荒廃」、翌年の七年一号に「森林濫伐と山川の荒廃」を寄稿している。非会員であったが、編集の小島烏水の見解で

掲載された。

六鵜と熊楠の交際は、熊楠の論文を六鵜が読んで感嘆したことを機に、1916(大正5)年に文通が始まった。六鵜は、植物学と民俗学で熊楠の協力者として十分に学識を備えていた。2人は1917(大正6)年6月、和歌山県田辺で会った。熊楠はその時の印象を「六鵜は32歳なりしが、18、9に見えた。諸種の運動の達人、古ギリシャの彫刻に見る如き体格で、本邦で多く見ぬ美丈夫だ」と記し、六鵜の眉目秀麗に驚いている。熊楠は、柳田國男が交通不便を乗り越えて、田辺に会いに来たのに、布団をかぶって顔も見ないで話をしたというほどの対人恐怖症であったのに、初対面の六鵜を気に入るとは不思議なことだ。

六鵜は、日本山岳会には1918(大正7)年5月入会。紹介者は服部正と何英吉で、会員番号6

08である。1923(大正12)年には幹事になり、記録を担当している。故郷は周防灘に面した海辺であり、子どもの頃から山に親しんだものではなく、山口高商の学生時代に鳳雛山^{ほうふ}に登り、植物と山の楽しみを覚えたのであろう。

熊楠は1922(大正11)年3月に上京する。「南方植物研究所」設置の寄付集めが目的であった。

7月17日から8月7日にかけて熊楠^{うまうし}、上松翁^{うまつゆ}、平松大三郎、六鵜の4人は日光へ植物採集にでかけた。上松、平松、六鵜の3人が採集した多くの標品を、熊楠が中禅寺湖畔の旅館で写生した。また六鵜は大谷川に入り、紫稻花(淡水の海綿)を採集した。この間、六鵜は日本橋の三井物産石炭購入部次長の職を休み、その後、退職。退職後、東京の植物を採集して送り、熊楠から震災前の貴重な粘菌、と感謝された。

六鵜は1923(大正12)年9月、関東大震災を機に帰郷して郵便局長を勤めたという。地方の知識人として新聞記者らとの交流があり、登山家でもあったので、その分野での後進の指導を行なった。熊楠には住所も教えず、連絡をと

ろうとしなかった。1929(昭和4)年まで日本山岳会に在籍していた。

この年、熊楠は植物分布、粘菌学を神島^{かしま}と御召艦「長門」で天皇に進講した。

南アルプス山岳図書館

山本良三

3月20日、静岡県榛原郡川根本町、奥大井の秘湯寸又峡温泉に山岳図書館がオープンした。南アルプスの静岡側に出来た初めての山岳図書館である。寸又峡温泉は南ア前衛の山々に囲まれた静寂の秘湯で「美人の湯」の誉れ高い。

南アの静岡県側はアプローチが長いためか、訪れる人たちがも少なく、今後に残されたフロンティア山城の一つである。県庁所在地の静岡市葵区内に3000メートル峰が8座あり、白根三山の間ノ岳頂上から聖岳頂上までが葵区に属している。こんな県庁所在地が他にあるだろうか。その割には県民の山岳への関心は薄いようである。昨夜来の雨にけむっていた空も

落成式の途中で青空となり、暖かい陽光がそそぐ気持ちの良い記念日となった。数十人の関係者の出席を得て完成したばかりの図書館内は無垢の杉、檜の香りに満ちていた。

70余名からの寄贈図書は6500冊(雑誌を含む)に及び、とりあえず仮配架されていた。寄贈図書の第一段目の目標は1万冊で、集本分野は山岳書を中心に大井川、水利、動物、植物、樹木、昆虫、菌類、土壌、地形、地質、民俗、周辺の歴史、紀行、森の文化、木の文化等に関する図書まで広範囲に及ぶ。

本館は奥大井地域活性化対策の一環として地元の意向を受けて、静岡総合研究機構の協力を得て、その実現化が特別委員会にて検討され、3年の歳月を要して完成されたものである。その陰には地元で実現化のために火の玉のようになつて推進した人物がいた。たった一人の力が、周辺関係者を動かして、大きな力となつてより広域の関係者を動かす結果につながったものと思われる。

本館は歩き出したばかりで、すべてはこれから運営いかににか

かっていると思われるが、通一遍の知恵程度では開店休業になりかねない。多様な人々との交流の場となるように、格段の努力を惜しんではならない。いずれ、寸又峡ガイド組合の事務所の機能も果たし、長い目には登山文化の継承という役割も果たしてくれることを願っている。

究極の歩行法を開発

小笠原 寛

長野県での2008年の山岳遭難は182件(転落70件、転倒42件)、199人(60歳以上が97人)と発表されています。なぜ転倒が多く遭難に至るのか、残念な数字です。

私はネパールの大病院で手術指導をするかたわら、余暇にヒマラヤを延べ5カ月歩いて歩行法などを研究しています。50歳にして心身統一合気道に出合い、バランスト呼吸法を学び山を再開した者ですが、私の開発した歩行法が少しでもお役にたてればと思い投稿した次第です。

これまで「ナンバ歩き」を工夫

しながら行なってきましたが、山ではシエルバのような歩幅や速度、登りの強さにはならず、なぜ彼らは柔らかく細い足なのに力強く登ることができるのかと考えていました。そして昨年末のヒマラヤで新歩行法に気がつき実践した結果、シエルバを超える歩きを確認しました。

それは、わら草履の鼻緒の親指側を意識する「新武蔵流歩行法」で、歩幅や速度調整が自由自在、省エネ、登りだけでなく下りや雪道にも強く、姿勢もバランスもスタイルもよくなり、膝周りの筋肉が鍛えられるというものです。この歩行法は、親指の付け根だけに集中すればよく、自然に丹田が使われますので習得も容易です。登りは大腿四頭筋の直筋に頼らず筋肉を総動員しますので力強く、下りでは足底が吸盤のようになり、膝への負担も少なく安定します。

原理は、四つ足動物に戻り大腿からでなく足から始動することで、幼児のヨチヨチ歩きを発展させたものです。つま先を少し開いて立ち、踵を少し上げて重心が親指の付け根にくるようにし、その感覚を覚えます。親指の付け根にゴム

ひもを付けて引っ張られる車輪があり、その回転で「ススー」と足が地面をこする感覚で気持ちよく足を前に出します。そして腰が前に移動してくると、先行した脚にしっかりと体重を乗せ膝を伸ばします。早歩きや急な登りでも地面を蹴ることなく親指の付け根で押すだけです。上体は左右や前後に揺れず正対した腰を使った二軸歩行で、手は自然に任せて意識して振りません。この親指の付け根を意識した歩き方は涉猟した範囲ではなく、八卦掌の歩き方に近いようです。この歩行法はスピードとバランスを改善します。

自宅で練習をし、慣れてきたら山で、そしてザックなど負担をかけて歩かれるとよいでしょう。24時間この歩行を意識すれば半年もすると身につくはず。腰を使った歩行は脳梗塞になった時のリハビリを容易にします。

若い時に山に習熟された人はこのような歩き方に近いでしょう。しかしそれほど山に入れなかった人、中高年になって山を始められた人には、歩き方の点検をお勧めします。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

図書委員会

第26回図書交換会

毎年、図書交換会の準備は、9月に会員に古書の出品をつのるこ
とから始まる。今回は10月末まで
に11名の会員から、和書431点、
洋書7点の計438点が集まった。
図書交換会を再開した第24回が4
21点、前回は214点。今回は
何点集まるだろうかと心配してい
たのだが、取り越し苦労だった。

それから出品図書に値段をつけ
て目録を作成し、会報やホームペ
ージで申込みの受付を開始した。
売れ残りが心配で、申込みがどれ
ぐらいあるのか、毎回ハラハラし
ているのだが、手紙やメールで63
名から申込みがあった。

さて3月7日、図書交換会を開
催。当日は30名の参加があり、事
前の申込み者と合わせると90名の
参加といえる。目録で目星はつけ

ているのだが、本の実物を見ると
ほしくなるのが「本好き」だ。参
加者一同、並んだ本をじっくり手
にとって眺める。

今回のハイライト6点の入札結
果を報告させてもらう。

三田幸夫著『わが登高行 上・下』
(特装本) 入札価格3万円、島田
翼著『山稜の読書家』(特装本) 入
札価格1万円、島田翼著『山・人・
本』(特装本) 入札価格1万550
0円、坂本直行著『雪原の足あと』
(特装本) 入札価格3万8000
円、本多勝一著『初めての山』(特
装本) 入札価格1万5100円、
木暮理太郎著『山の憶ひ出 上・
下』(初版本) 入札価格1万650
0円。

今回は一挙に6点を入札本にし
たのだが、全点に入札があり、ひ
と安心。特に『雪原の足あと』に
は9名からの入札があり、坂本直
行の人氣が今でも衰えていないこ



今回も盛況だった図書交換会

とを実感した。また今回の一番人
気は『山のABC』(創文社)で、
20名の応募があった。『登山史の周
辺』『登山史の発掘』(ともに山崎
安治著)、『山と書物 正・続』(小
林義正著) もさすがに人氣が高い。
最終的には374点を販売する
ことができた。無事に図書交換会を
終えることができた。前回に続い
て今回も、三島市の長田義則会員
からみかんが1箱が届き、参加者
一同たいへん美味しくいただいた。
長田会員にこの場を借りてお礼申
しあげたい。

図書交換会の終了後にもまだ作
業は残っている。代理で抽選をし
た、当日参加できなかった会員へ

の本の発送と代金の回収、そして
出品者への支払い(代金の8割)
だ。この会報が届く頃には、準備
から半年かかったこの行事もすべ
て終える。

作業の大変さをねぎらってくだ
さる声も多いが、3回の図書交換
会で、約1000点の山の本を実
際に手に取って見る機会を得た。
このことは何にも増して大きな財
産となった。
(三好まき子)

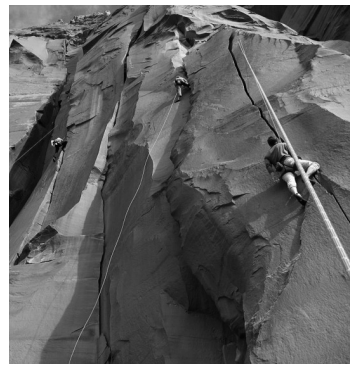
海外委員会

AACクライマース・ミーティン

グと雪男探検隊
2月13日、海外委員会主催の2つの講演会が開催された。会員や会員外を含めて30名の参加者があり、盛会となった。

「AACクライマース・ミーティング」は、アメリカ山岳会が毎年開催しているもので、昨年は10月3日から14日までの12日間にわたって、アメリカ・ユタ州のインディアン・クリークで行なわれた。日本からは岡田康さん、伊藤仰二さんの2名が参加し、その模様を伊藤さんに報告してもらった。

会場に集まった参加者には聞き慣れないクライミング用語が多く、かつての「登攀」とは様変わりした様子を、スライドを見ながら実感してもらえたと思う。「こんな登り方もあるんだ……」と思わせる報告だった。



大岩壁を登る各国の参加者

なお、今回参加した2名の渡航費については、日本山岳会から支援してもらった。今後も若い会員がこのような集会に参加できるよう、支援を続けたいと思う。

「雪男探検隊」は、海外委員会の委員でもある八木原啓明さんから、昨年8月から10月にかけて行なわれた第3次搜索の模様と、これまでに行なわれた第1次搜索(94年8・9月)、第2次搜索(03年8・10月)の概要を話してもらった。

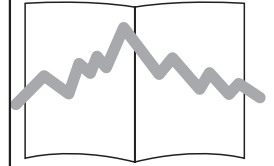
搜索地域は、ネパール中央部のダウラギリ山群・ダウラギリIV峰南面。定点カメラの設置や迷彩テントの中から息を殺しての観察など、苦労話をおもしろおかしく報告してもらった。

新聞などのメディアで報道された「足跡」については、詳細な説明はなかったが、参加者のなかから「雪男」の進化の仮説などの話もあり、熱気を帯びた議論が交わされた。「いるわけない」と頭から否定するよりも、「いるかも知れない」と思った方が「ロマン」があると思うが、いかがであろう。

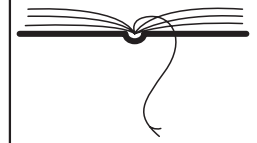
(井本重喜)

図書受入報告 (2009年3月)

著 者	書 名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
浜島一郎	いざという時に使える! 野外生活の基礎知識	143p/19cm	JTBパブリッシング	2009	出版社寄贈
柏澄子	海・山・キャンプ場でアウトドア救急ハンドブック	161p/19cm	JTBパブリッシング	2009	出版社寄贈
ライチョウ会議(編)	第9回ライチョウ会議新潟大会報告書(2008年11月)	132p/30cm	ライチョウ会議	2009	発行者寄贈
広島山稜会(編)	峠——広島山稜会創立40周年特集号	258p/30cm	広島山稜会	2009	発行者寄贈
吉永みち子	怖いもの知らずの女たち	237p/20cm	山と溪谷社	2009	出版社寄贈
権藤司(編)	山から始まる自然保護——山の自然学クラブ会報(第8号)	216p/30cm	山の自然学クラブ	2009	発行者寄贈
鮫島信子(校閲)	日本の国立公園——National Parks of Japan	127p/30cm	自然公園財団	2009	発行者寄贈
酒井國光・他(編)	多様な登山観のなかで——昭和山岳会創立70周年記念誌	273p/26cm	昭和山岳会	2009	発行者寄贈
松田要悦	断想	295p/21cm	松田勝江(私家版)	2009	発行者寄贈
秩父宮雍仁親王	秩父宮とスポーツ	31p/30cm	秩父宮記念スポーツ博物館	2009	発行者寄贈
成瀬陽一	俺は沢ヤだ!	190p/19cm	東京新聞出版局	2009	出版社寄贈
山岳写真同人四季(編)	墨色 日本の山[写真集]	96p/25cm	東京新聞出版局	2009	出版社寄贈
東京都山岳連盟(編)	変革の礎——東京都山岳連盟創立60周年記念誌	64p/26cm	東京都山岳連盟	2009	発行者寄贈
山森欣一(編)	神々の座 7000m峰挑戦の記録(2004年版)	242p/30cm	日本ヒマラヤ協会	2009	発行者寄贈
伊佐九三四郎	モロッコの風	214p/20cm	白山書房	2009	出版社寄贈
保谷昇・都竹茂樹(編)	山刀——飛騨山岳会創立100周年記念特別号	143p/30cm	飛騨山岳会	2008	発行者寄贈
池田昭二	忘れがたい山	220p/19cm	無明舎出版	2009	著者寄贈
木戸賢吉	青春は遙かなる稜線に	546p/22cm	木戸賢吉(私家版)	2008	著者寄贈
G. Mortenson & D.O. Relin	Three Cups of Tea	338p/24cm	Viking	2006	購入
Clint Willis	The Boys of Everest	536p/22cm	Carroll & Graf	2006	購入
B. McDonald	Brotherhood of the Rope	251p/24cm	Baton Wicks	2007	購入
Stephen Venables	Higher than the Eagle Soars : A Path to Everest	370p/24cm	Hutchinson	2007	購入
Peter Mallalieu	The Artists of the Alpine Club : A Biographical Dictionary	232p/16cm	The Alpine Club	2007	購入



図書紹介



藤本一美・著

『展望の山50選 関東編』

絵画で楽しむ山岳ハノラマの世界



2008年12月
東京新聞出版局刊
A5判 183頁
定価 1680円

手描き山岳展望図の第一人者である藤本一美氏の著書が出版された。副題は「絵画で楽しむ山岳ハノラマの世界」。「展望の山旅」シリーズが完結されてから8年ぶりの出版である。

著者は一昨年に都立高校を退職されるまで社会科(地理)の教鞭をとりながら、関東甲信越の山々を歩き続け、展望図や鳥瞰図の収集・研究などに取り組んでこられた。1987年には田代博氏との共編著で実業之日本社より『展望の山旅』を出版。このシリーズは

90年に『続・展望の山旅』、95年に『続々展望の山旅』、2000年に『車窓展望の山旅』と四部作のヒットとなった。私が登山を始めたころも、これらの本(時にはそのコピー)をザックにしのばせ、山頂に着いたら著者の職人芸ともいえる手書きの展望図のページを開いては、「山座同定(山の名を判定すること)」に励んだものである。

今回の著書でも関東圏を中心に、奥武蔵・秩父・比企、奥多摩・奥秩父・中央線沿線、丹沢・三浦半島、湘南・箱根・伊豆、信州・上州、房総・常陸までの50座を取り上げ、山頂からの手書き展望図と、山名考証や自然・歴史民俗・植生など広範囲にわたるエッセイが収録されている。好展望で名の通った著名な山がある一方、弟富士山や二ノ宮山、三筋山、矢祭山など私が初めて名を聞く山もあった。先日、「著者にとってこだわりの

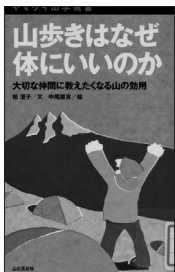
ある山」と述べられている南佐久の御座山に登った。その日もそこそこの晴天に恵まれ、八ヶ岳や浅間山、西上州、奥秩父、南アルプスなどの展望を得られて大満足して帰ってきた。しかし帰宅後この本の展望図を開いてみると、私が目にした山々のさらに奥に志賀や谷川連峰、尾瀬、日光、遠くは筑波山までが描かれている。著者は展望図を書くため、好展望を得られる冬場に幾度となく山に通われたに違いないと脱帽した。

ただ1点だけ、今回は前回までの『展望の山旅』四部作とは出版社が変わったこともあり、従来のような格調ある装丁でない点が残念気がした。(木根康行)

柏澄子・著

『山歩きはなぜ体いいのか』

大切な仲間になぜたくなる山の効用



2009年2月
山と溪谷社刊
17センチ×11センチ 189頁
定価 1000円

著者は、山の世界で活躍する数少ない女性のライター。とくに最

近は、昨年の夏に上梓した『ドキユメント山の突然死』(山と溪谷社刊)、当会の会報『山』10月(761)号の巻頭記事(竹内洋岳氏の活動報告)、そして本書と、彼女の精力的な活動ぶりを目にする機会が多い。

本書は「ヤマケイ山学選書」シリーズの最新作として、『山で困ったときのテクニク』(岩崎元郎著)と同時に出版されたものだが、山歩きの効用を「健康な体をつくる」「病気の予防」「脳のトレーニング」「ストレス解消」などの面からわかりやすく解きあかしてくる。

たとえばトレーニングやストレッチングの方法は、イラストを使って紹介されているし、病気の予防の項では、グラフや表が有効に使われ、さまざまなデータの数値がきちんと示してある。読者にとってはなによりも説得力があり、安心して読むことができる。

わかりやすい言葉で書かれていて読みやすいので、気がつかずに読んでしまいそうだが、実はたいへんな量の情報がコンパクトに盛り込まれている。取材と調査に労を惜しまず、真面目にテーマに取

り組む著者の人柄が感じられる。「山歩きの効用」は人それぞれに違うだろうし、「効用」だけではなくマイナス面ももちろんある。本書は身体だけではなく、精神面への効用に、大きくページをさいている。それは、山歩きが「体がいい」という側面だけから登山にアプローチするのではなく、実は「心がいい」という本質を感じとってほしいという、読者への願いだ。

著者は、続いてこの3月に『アウトドア救急ハンドブック』(JTBパブリッシング)を上梓。女性ライターのさらなる活躍を応援したい。

(三好まき子)

『一竿有縁の溪』

根深誠・著



2008年12月
七つ森書館刊
B6判 227頁
定価 2100円

「春である。釣り人が、夢みる季節である」と本書は始まる。雪に隠され寒水に眠った魚達が目覚め、釣り人は勇み立つ。

私は釣りを趣味としないが、釣りの本を読むのは好きである。ウオルトン、井伏鱒二、開高健、山本素石、彼らの本には釣りが好きで好きでたまらない少年のような気持ちがある。どの文章からも読み取れるからだ。憧れが少し大袈裟になつて大魚を釣り逃したと言うホラ話、釣果がないと拗ねたり、憤ったり、嘆いたりとは話は次々と広がり、ますます面白くなる。本書はそんな本である。

昔から溪流釣りの盛んな旧い城下町に生まれ育った著者が、北は知床から南は九州の溪までを釣り歩き、一竿を縁として人々と出会う。旅に出て旅を想い、旅に憧れ、釣りに出て釣りを想う本である。旅をして、釣りをして酒を飲んで、人々と語り、温泉に浸る。釣りに憑かれ、山で宴会を繰りひろげる少し滑稽で酔狂な釣り人。しばしつき合ってみたい気になる、そんな優しい本である。

話は農村の早苗祭りからヒマラヤの祭りへ、自然が内に持つ力をたたえ、環境問題を憂い、人間の無謀さに耐える自然を生き生きと描く。自然が豊かであるということとは、その環境や生活が過酷だと

いうことだが、そこに暮らす人々への温かいまなざしは、著者自身がすでに山人だからであろう。

本書は月刊『津軽』と『溪流』の連載に加筆し、なごり雪の浅春から新雪の深秋までの釣り旅が、四章(第一章・釣り旅の記——春から夏へ、第二章・釣り旅の記——盛夏、第三章・釣り旅の記——秋へ、第四章・釣り旅の周辺)で構成されている。どこから読み始めても、著者と共に自然の恵みと人々とのつながりに浩然とした気持ちになることができる。そして最終章はしつとりとまとまっている。著者の語り口は、酒のせいでも円熟し、練達の域に達してきたように感じると褒めておこう。そして書中の豊富な写真は素敵だ。

私はこの本を読むために、盛夏の章ではビールを飲み、秋への章ではウィスキーを、最終章では熱燗を飲み、ついつい著者につられて過ごしてしまった。しかし、「釣り落とすのも釣り、釣れないのも釣り……風とたわむれ、溪にくつろぎ、一竿の風月に身を託す」著者には、肝臓をいたわり腰痛をなだめながら年齢を超す本を書いてほしい。そして、「奇跡を信じたけ

れば釣りをするがいい」との諺のように、その奇跡を信じて、これからも山へ溪へ出かけて、人はやはり自然の中にいるのが一番という酒のすすむ一書を期待する。

本書は釣り好きの人はもちろん、肘掛け椅子の釣人、沢登りの愛好者に、そして酒の好きな岳人に特にお勧めしたい。

さてそれでは、本を閉じて一本の竿か一升の酒を持って、残雪の山に溪に出かけようではないか。

(絹川祥夫)



原真 (1936-2009)

3月19日夜、なんということもなく眠りについた原さんは、翌朝すでに彼岸の人となっていた。脳血栓だったと聞く。長く闘病に煩わされることもなくスバッと人生を終えたところは、いかにも原さんらしいというのが、訃報を聞かされたとき最初に思ったことだった。1966年のアコンカグア南壁、70年のマカール南東稜と、日本山岳会東海支部を舞台として2つの遠征登山に成功したあとはもっぱら登山界の論客として名を馳せた。マカールの経験を土台とした組織論や高所順応論は、持ち前の鋭い舌鋒とあいまって大きな影響を当時の登山界に与えた。日本山岳会では高所登山委員会を担当して数々の研究会を主催し、その成果を『高所登山研究』『ヒマラヤ研究』として世に残した。

いっぽう実践面では、70年代半ばにいち早く組織登山を捨て去り、ラトック山群やパミール、インド、アンデスなどへ遠征を繰り返した。82年には、シシャパンマ(中央峰)のアルパイン・スタイル登頂に成功している。単なる「論」の人にとどまらなかったことを示す好例といえよう。

活動の足場も、やがて東海支部から自ら経営する病院内に設立した高所登山研究所に移した。効率のよい高所順応作戦の確立を目標として低圧室を利用したトレーニングを導入。高地トレーニングの重要性が認識された現在から考えれば、かなり先見の明があったといふべきであろう。

編著書は数多いが、『還らざる者たち』『頂上の旗』『ヒマラヤ・サバイバル』の三部作(いずれも悠々社)を代表作として挙げておく。

(池田常道)

吉田 宏 (1913-2009)

ヒマラヤンクラブ名誉会員で、本会元評議員の吉田宏氏は、2月27日、老衰のため、逝去された。享年96歳。

故人は1913年、東京・高輪に生まれ、慶応義塾幼稚舎に入学、1935年経済学部卒業まで、体育会剣道部で活躍。クラスメートには、桜内義雄(元衆議院議長)がおり、春、夏、冬の休みには、桜内ら仲間と身体を鍛えるため、北アルプスはじめ冬の富士山にも2回登頂していた。

戦後は、ドッドウエル商会の輸出部支配人となり、得意な英語力を駆使して、国際入札などで業績をあげ、1956年にはシカゴに本社のあるIMC社の日本代表となり、30年間、代表を務めた。引退後はメリル・リンチ社の顧問として15年間、財界人として活躍した。1973年の還暦の年には、シヤモニを訪れ、モンシ・ブランを登頂したことがきっかけとなって登山を再開する。また、この年よりボーイスカウト振興国会議員連盟会長の、桜内義雄議員の要請もあつて、ボーイスカウトの活動に入る。

76年、植村直己が踏破した北極圏単独犬橇1万2000^キ行の報告会に出席して植村を知る。以後、植村の海外遠征の際のサポートと日本での連絡窓口を引き受ける。78年、植村は、北極点到達後、グリーンランド単独縦断に成功。これを出迎えるため、吉田氏は、ナルサスワックまで、西堀栄三郎、植村公子夫人と同道。世紀の偉業を達成した植村への協力を惜しまなかった。

一方、1993年には、多年にわたるスカウト活動への貢献により、世界スカウト委員会から最高勲章のBronze Wolf章を受ける。さらに08年9月にはボーイスカウト日本連盟からも最高勲章である雉章を受章した。

また、日本山岳会においても四期8年間にわたり評議員を務め、本会の海外登山隊に対する財界・企業からの募金活動に尽力された。諸外国との渉外面でも、内外の人脈と優れた語学力を駆使して、協力を惜しまなかった。

訪日する外国人登山家をよく自宅に招待するなど、国際交流の面で、静子夫人ともども多大の貢献をされていた。

(松田雄二)



平成20年度臨時理事会

日時 平成21年2月26日18時30分
～21時

場所 日本山岳会会議室

【出席者】 宮下会長、神崎副会長、
宮崎・吉永・成川各常務理

事、斎藤・藤井・石橋・太
田・堀井・相馬・山川・岡
部各理事、深川・竹中各監
事

【委任】 峯坂副会長、古野理事

【欠席】 日下田・河野・近藤各常任
評議員

【審議事項】

1・平成21年度事業計画案（宮崎・
吉永）

各委員会及び各支部から提出の
あつた平成21年度事業計画案につ
いて

①公益目的事業 ②公益事業（会員

のための事業）に分けてその内容
についての説明があり審議した。

3月14日開催の平成20年度第2回
通常総会の議案とする。（承認）

2・平成21年度予算案（吉永）

平成21年度の収支予算案の説
明があり審議した。平成20年度暫
定取り扱いの支部助成金は平成21
年度にも引き続き実施するとの説
明があつた。3月14日開催の平成
20年度第2回通常総会の議案とす
る。（承認）

【報告事項】

1・平成21・22年度役員の選任に
ついて（宮崎）

今期末で役員および評議員任期
が満了、改選となるため今後の選
任手順について説明があつた。

2・第25回宮崎ウエストン祭案内
（宮崎）

11月3日に宮崎県高千穂町にて
開催する旨、宮崎支部から連絡が
あつた。

3・森づくり連絡協議会への出席
依頼（宮崎）

2月28日に東海支部ルームで開
催（8支部24名参加）する案内が
東海支部から届いた。宮下会長に
代わつて吉永常務理事が出席する。

4・ツール・ド・TANIGAWA
谷川連峰ロングトレイルランニン
グについての意見書（山川）

山岳団体自然環境連絡会から貴
重な山岳環境、参加者および登山
者の安全面等の点から開催を憂慮
しているとの意見書を主催者たる
群馬県みなかみ町長宛てに出した。

また、環境省も慎重な対応を求
めた模様で、主催者は開催中止を
決定したとの報告があつた。

5・第39回・山岳図書を語る夕べ
『梅里雪山 17人の友を探して』
（宮崎）

3月25日、ルームで開催すると
の連絡が図書委員会からあつた。

6・映画『劔岳 点の記』キャン
ペーン依頼について（宮崎）

6月上映予定の上記映画につい

て東映(株)からキャンペーン実施の
協力依頼があつた。試写を鑑賞の
上、今後の理事会で検討する。

平成20年度第11回(3月度)理事会

日時 平成21年3月11日18時30分
～21時

場所 日本山岳会会議室

【出席者】 宮下会長、神崎副会長、
宮崎・吉永・成川各常務理

事、斎藤・藤井・石橋・古
野・太田・相馬・山川各理

事、深川・竹中各監事、河
野・近藤各常任評議員、神
長会報編集委員長

【委任】 峯坂副会長、堀井・岡部各
理事

【欠席】 日下田常任評議員

【審議事項】

1・高尾の森づくりの会活動につ
いての順守・改善指示および回答
（宮崎）

自然保護委員会「高尾の森づく
りの会」に対して平成21年2月16
日付にて会長名でその活動運営の
適正化、諸規則等の順守・改善に
ついて具体的な指示文書を出した

ところ、3月6日付で高尾の森づ
くりの会代表・河西瑛一郎会員か

総会には出席しましょう。欠席者は必ず委任状の提出を！

ら回答があった。審議の結果、再度回答を求めることになった。

【協議事項】

1・理事・評議員の改選について (宮崎)

平成21年度は理事・評議員の改選期にあたるため、今後、定款・細則等に則った改選手続きにより3月25日までに候補予定者の推薦をお願いする。

【報告事項】

1・予算管理月報 (吉永)

2月末現在、前年度に比し収入は230万円、支出は510万円それぞれ減少しているが、予算執行状況は収入および支出ともほぼ前年度並みに推移している。なお、年会費滞納者は70名で例年より若干少ない。

2・森づくり連絡協議会報告 (吉永)

2月28日～3月1日、名古屋で開催され、森づくり事業をもつ11支部中8支部が参加した。

3・神奈川大学チョモランマ遠征登山隊壮行会開催案内 (神崎)

2月19日付にて開催(3月6日)の案内があり、神崎副会長と古野

理事が出席した。

4・日本ヒマラヤ協会の組織改革について (宮崎)

3月3日付にて日本ヒマラヤ協会から諸般の事情によって4月1日以降新体制で運営することになった。事務所を福島市に置き、月刊『ヒマラヤ』を廃刊するほか、3月末をもって東京都山岳連盟からの退会、ならびに山岳4団体三役懇談会から離脱することにしたとのことであった。

5・都岳連協賛共同企画について (宮崎)

山小屋・旅館宿泊割引、登山用具販売割引特典の案内があった。

6・平成20年度第2回総会の準備状況について (宮崎)

3月9日現在、回答(返信)総数は3141名。出席回答及び欠席委任状の状況から判断して総会是有効に開催できる見通しにある。

7・所蔵資料IT化による検索について (岡部)

100周年記念の事業予算の一環として資料映像委員会では資料の保管、整理の利便性を図るためIT化作業を推進中であったが、約7割程度の入力状況で検索テストを実施した。今後ソフト面の入

力情報においてさらに研究が必要の模様。その他検索専用PCの設置場所の要望が出されている。

8・岐阜支部定時総会・春季懇親山行のお知らせ (宮崎)

総会(4月18日揖斐川町)、懇親山行(4月19日)開催案内があった。

9・山陰支部創立60周年記念式典予定と会長出席依頼について (宮崎)

11月28日、米子市における式典開催の案内と会長出席依頼があった。

10・山梨支部「通常総会」への本部役員の派遣について (宮崎)

4月11日、甲府市で開催の案内と本部役員派遣の依頼があった。

11・映像使用の許諾申請について (岡部)

日本テレビ放送網(株)から、1992年10月4日に日本テレビで放送された故・植村直己の映像にかかわる「エベレストへの道」放映についての許可申請があった。資料映像委員会で承認した。

12・公開講座での写真使用について (岡部)

NPO法人地域マップ研究所(静岡県三島市)から、4月29日

開催予定の公開講座『劔岳点の記』に学ぶ地図づくりのロマン』で当会所蔵の宇治長次郎の写真パネル借用依頼があった。資料映像委員会で対応。

13・平成20年度第2回評議員会の開催について (宮崎)

(財)自然公園財団から3月17日、法費会館(東京都千代田区)にて開催案内があった。会長出席の予定。

14・2009年度自然保護全国集会について (山川)

自然保護委員会と秋田支部共催で6月20～21日(秋田市及び太平山)にて開催される。

15・会報「山」3月号編集報告(神長)

ルーム日誌 3月

- 2日 定款検討委員会
- 3日 図書委員会 アルパインス ケッチクラブ
- 4日 常務理事会 集会委員会 山岳地理クラブ
- 5日 101の会
- 6日 アルパインフォトクラブ
- 7日 評議員会 図書委員会
- 9日 総務委員会 高尾の森づくりの会 アルパインスケ

第11回「秩父宮記念山岳賞」の推薦について

秩父宮記念山岳賞審査委員会

第11回「秩父宮記念山岳賞」の推薦（他薦のみ）を下記の通り受付けますので、事務局まで資料をご請求下さい。多数の推薦をお待ちしております。

- 対象分野 ・登山活動
・山に関する文化活動
- 提出先 日本山岳会内 秩父宮記念山岳賞事務局
- 締切り 平成21年8月末日

10日 ッチクラブ
アルパインスキークラブ
九五会
11日 理事会 山想倶楽部
12日 山の自然学研究会 アルパ
インスキークラブ
13日 総務委員会 集委員会
16日 資料映像委員会 アルパ
インスキークラブ
17日 山岳研究所運営委員会 図
書委員会 00会 アルパ
インスキークラブ
18日 山岳地理クラブ 三水会
つくも会

19日 科学委員会 海外委員会
23日 学生会
23日 総務委員会
24日 インターネット小委員会
千葉支部 アルパインフ
ォトビデオクラブ ゆき
わり会
25日 自然保護委員会 図書委員
会
26日 学生会 土曜会 山遊会
30日 常務理事会 システムプロ
ジェクト アルパインス
キークラブ
31日 スケッチクラブ
3月来室者619名

会員異動（3月）

物故

平田静一郎(2846) 09・3・4
澤井貞夫(3674) 09・3・9
若林修二(6227) 08・10
葛西森夫(9367) 08・12・8
日比行雄(13195) 07・2・12
退会
青木宏悦(5541) 福島
板井辰美(5574) 福島
尾崎祐一(5822) 東海
森 勲夫(6033) 東海
渡辺誠司(6147) 東海
今木良彦(6243) 関西

針谷迪夫(6407) 北海道
愛知学院大学学友会山岳部
(6410) 東海
森 宏子(6534) 北海道
辻井達一(7033) 北海道
増田圭次(7044) 北海道
鶴田倍弘(7274) 東海
榎本 崇(7870) 千葉
家 浩(8451) 岩手
棚田房男(8632) 岩手
田中淑子(9195) 越後
西原幸子(9200) 越後
島田義昭(9312) 越後
莊司 等(10124) 越後
岡田敏夫(10215) 越後
大平元次(10323) 福島
中山 繁(10360) 福岡
嶋原義昭(10596) 北海道
坂尾藤江(10638) 北海道
平野博志(10746) 北海道
伊地知六子(10775) 北海道
中村喜吉(10978) 北海道
西川昭彦(11318) 北海道
萩田 實(11165) 東海
黒宮國男(11651) 東海
川畑一文(11653) 東海
神戸信和(11834) 東海
鈴木 聰(11889) 東海
長岡昭雄(12025) 山形
長岡五百子(12026) 山形

奥村マツ子(12153) 越後
日本曹達山岳部(12547) 越後
塚本一彦(12742) 関西
福田良壽(12921) 関西
澤口正武(13004) 北海道
辻井泰輔(13006) 北海道
松元律子(13025) 宮崎
亀井清太郎(13053) 京都
小森 昭(13164) 北海道
中川一江(13202) 北海道
若井登久雄(13212) 岐阜
小川 博(13393) 岐阜
山本照男(13516) 岐阜
鎌田和代(13603) 宮城
大坪秀二(13640) 宮城
亀田謙一(13794) 北九州
加藤謙藏(14179) 富山
和田秀明(14195) 北九州
納谷克美(14251) 京都
那須正義(14453) 広島
終身会員
野崎裕美(6478)
笠原正明(6817)

I N F
O R M

インフォメーション

A T I
O N

◆新入会員のための企画「徳本峠越えとウェストン祭」

山研運営委員会

ウェストンの足跡をたどり、新緑の島々谷から残雪の徳本峠を越えます。山研に1泊して、翌日「碑前祭」に参加。新会員の仲間づくりを手助けする企画です。

日程 6月6日(土)～7日(日)

費用 1万2000円(1泊2食、午餐会費、記念品代、傷害保険料)

定員 20名(20年度入会の会員および本会会員の希望者)

申込 5月23日までに柴山信夫宛

TEL 044-900-3439

✉ sijasac@sannet.ne.jp

*現地集合・解散

*申込者に詳細を送ります

◆探索山行のお知らせ

科学委員会

「谷川岳の氷河地形と平標山の周

氷河地形」をテーマとした山行。

日程 6月13日(土)～14日(日)

場所 谷川岳東面の沢、平標山

講師 小嶋尚会員ほか

費用 1万9000円

定員 35名(先着順)

申込 5月15日までに、ハガキまたはメールで石田要久宛

(〒176-0003練馬区羽沢1-2-6)

✉ kzmn2116@nifty.ne.jp

*申込者に詳細を送ります

◆大峰奥駈道を歩く

集会委員会

山岳古道「奥駈道」を歩きます。

日程 6月10日(水)～14日(日)

集合 10日16時、吉野上千本宿坊

解散 14日11時、大和上市

費用 4万6000円

定員 20名

申込 5月10日までに砂田定夫宛

(FAX) 042-755-8721

✉ Sunadacln@com.home.ne.jp

*申込者に詳細を送ります

◆「高頭祭と中越地震断層帯」訪問

科学委員会

越後支部主催の高頭祭に参加し、中越地震の被災地も科学探索します。

日程 7月25日(土)～26日(日)

内容 25日、高頭祭参加と登山

26日、講演「越後山脈の誕生と中越地震の関わり」と山

古志村探索

集合 JR上野駅文化会館前7時

費用 2万5000円(宿泊・往復貸切バス・研修探索代)

定員 25名(先着順)

申込 5月20日までに石岡慎介宛

TEL & FAX 047-335-2522

✉ bistari@alto.ocn.ne.jp

*申込者に詳細を送ります

◆第2回「泰澄祭」開催

福井支部

泰澄が修行した日本100霊峰「越知山」、入寂の地「大谷寺」などゆかりの地で足跡を訪ねます。

日時 5月31日(日)(前夜祭30日(土))

会場 「泰澄の杜」(糸生温泉、大谷寺および越知山)

費用 1泊1万2000円、懇親

会のみ70000円、ウォーク・泰澄祭無料

申込 4月30日までに船田洋子宛

(TEL & FAX) 0776-2616858

◆白神山地ブナ林再生事業

青森支部

世界遺産白神山地のバッファゾーン周辺で生育不良杉林地をブナ林に再生するため、除伐や植樹などを行なう。寝袋、食器必携。出来ればテントも各自で用意。青森空港送迎は要相談。

日程 6月26日(金)～28日(日)

集合 26日8時、JR弘前駅城東口か10時半、奥赤石林道ゲート

解散 28日15時 奥赤石林道ゲート

費用 食費1食5000円(現地徴収)

定員 50名

申込 6月14日までに、ハガキまたはメールで須々田秀美宛

(〒036-0103平川市本町北柳田96-2) ✉ susuta@hotmail.com

◆予告 ドロミテを歩く

集会委員会

仮予約受付中。詳細は次号にて。

18

田淵行男記念館

長野県安曇野市豊科南穂高5078-2

TEL・FAX: 0263-72-9964

URL: <http://azumino-artline.net/tabuchi/>



観覧料 大人300円、小中生 200円
(団体料金は問い合わせください)

※特別展示開催は別料金

開館時間 9:00~17:00

(入館は閉館の30分前)

休館日 月曜日(祝日の場合は開館)、

祝日の翌日 ※4月30日(木)は臨時開館

交通機関 JR大糸線柏矢町駅から徒歩20分、
JR大糸豊科駅、穂高駅からタクシーで10分、長野
自動車道豊科ICから車で約5分

——山岳写真と高山蝶、自然への限りない愛情——

田淵行男記念館は、安曇野のナチュラリスト・田淵行男を顕彰するため、1990年7月7日に開館しました。ご遺族のご厚意を得て、現存する田淵作品のほぼ大半、約73,000点のフィルム(ガラス乾板を含む)を収蔵しています。また、カラーフィルムのない時代、「本物の美しさを持ったチョウの図鑑を作りたい」との思いから描き始められたチョウの細密画や、カメラ・ TENTなど愛用の品々など、田淵の仕事が把握できる展示内容となっています。

「自然から読み取り学ぶ知識がもっとも正しい」という独自の信念のもとさまざまな作品や研究結果を残した田淵行男、この根っからのナチュラリストの記念館としてふさわしい自然との調和が感じられる施設空間です。

記念館では年3~4回の企画展でこれらの収蔵品を紹介し、「雪形探訪」「常念登山」「写真教室」などの講座を開講して、田淵行男が残したメッセージをさらに多くの方々に知っていただけるよう取り組んでいます。

現在は企画展「安曇野残影~ナチュラリストのメッセージ~」を開催中(7月5日(日)まで)。1989年5月30日にこの世を去った田淵行男の没後20年に当たる今年、あらためて彼のメッセージに耳を傾け、よりよい未来を創造するヒントにしたいと考えています。

日程 8月17日~26日 10日間
定員 15名(先着順)
費用 53万円(予価)
申込 植木淑美宛 FAX 042-1734-1498
✉ yoshimi-denai@jcom.home.ne.jp

◆第29回日本登山医学会学術集会

日本登山医学会

特別講演と各種シンポジウムが
開かれます。

日程 5月30日(土)~31日(日)

講演 三浦雄一郎

会場 東京コンファレンスセンタ

1品川

問合 日本心臓血管研究振興(会附

属神原記念病院

TEL 042-314-3111

FAX 042-314-3150

✉ jismm@29tozanigaku.jp

◆大谷一良木版画展

喜寿を迎えた大谷一良会員の記

念個展を開催。

日程 4月24日(金)~29日(水)

場所 緑陰館ギャラリー(小田急

線成城学園駅)

問合 緑陰館ギャラリー

TEL 03-3483-1112

6・会期中)

◆編集後記◆

● 昨年の11月号と12月号のオピニオン欄で、森づくり活動のあり方をめぐって相反する意見が掲載され、以後、いくつかの意見が寄せられました。おりから自然保護委員会と高尾の森づくりの会の間で話し合いがもたれ、会報委員会としても静観していましたが、ここですら一定の解決をみました。その間の経緯を成川常務理事に綴ってもらいました。

● うらかな春の一日、堀田名誉会員の百寿を祝う会が母校の立教大学で開かれました。ほんとうにお元気で、そのご様子は今村さんの文章にあるとおりです。こうした方々の存在が、山岳会の貴重な財産だと再認識しました。

(神長幹雄)

日本山岳会会報 山 767号

2009年(平成21年)4月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビューハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 日本山岳会会長 宮下秀樹

編集人 神長幹雄

Eメール jac-kaiho@jac.or.jp

印刷 株式会社 双陽社